

平成21年度北九州市地方独立行政法人評価委員会（第1回）

日時：平成21年7月2日（木）

14:00～16:00

場所：本庁舎5階 特別会議室A

（委員長）

それでは、ただ今から、次第に従って議事を進めてまいりたいと思います。では、本年度の評価委員会のスケジュールについて、事務局のほうからご説明をお願いします。

《事務局より今年度評価スケジュールについて説明》

（委員長）

ありがとうございました。

委員の皆様、意見・質問等があれば、お願いします。

《各委員了承》

（委員長）

それでは、次の議題の「北九州市立大学矢田学長との意見交換」に移ります。矢田学長から「平成20年度の改革と成果について」ご説明いただき、その意見交換を行いたいと思います。

それでは、矢田学長、よろしくお願いします。

《矢田学長より「平成20年度の改革と成果について」説明》

（委員長）

矢田学長、ご説明ありがとうございました。

これにつきまして、委員の皆様、質問・意見等があればお願いします。

（大学事務局）

少し紹介したいと思いますが、大学は国立・公立・私立の3つの大きな分類がありまして、それぞれに全国組織がございます。私どもは公立大学ということで、公立大学協会というものが、約70～80校弱あるのですが、今年、矢田学長が公立大学協会の会長に就任されまして、今年と来年2年間、本学改革に加え、全国の公立大学のために仕事をしていくということになっておりますので、ご紹介させていただきます。

（委員長）

ありがとうございます。そういう中でさらに北九州市立大学をいろいろと改善されてきたというのは、いい傾向だと思います。

どうぞ、何か質問等はありませんか。

（委員）

ご質問を2つほどさせていただけたらと思います。

1つは、学生支援のところの学生プラザについてですが、これは北方だけですよ。ひ

びきののほうにも、同じようなものがあるのですか。

(学長)

ひびきののほうには、プラザという名前は付けていません。

(委員)

プラザではないのですか。

(大学事務局)

はい、学生の相談のコーナーはありますが、そこは、こういったプラザという名前ではありません。

(委員)

そうですか。機能としては、同じようなものがあるわけですね。

(大学事務局)

北方と同じく、学生のラインの職員が担当しています。また、カウンセラー等は週に何回か定期的に来ています。保健師は毎日来ています。

(学長)

ひびきのの学生数は1,000名、北方は5,000名です。ひびきのは1学部ですので、非常に顔が見える。先生の研究室が非常にしっかりしていますので、あえてマスプロ的な形の対応をしなくてもやっていけるのかなと思っています。

(委員)

先生方がきめ細かく対応できるということですか。

(学長)

そうです。

(委員)

分かりました。それから、もう1つは、入試のシステムの推薦入試についてです。これは昨年、とてもよい面と、少し心配な面もあるのではないかという意見が出ていたと思うのですが、成果としては、大学としては、どのようにご覧になっていますか。

(大学事務局)

AO入試の件ですね。

(委員)

はい。やってよかったとか、それなりの学生の方が入って来ているとか、そのあたりのお話を少しお聞かせください。

(学長)

我々は入試現場のそのものには行きませんので、どこまで正確に答えられるかわかりま

せんが、原則的には、ペーパーテストは、学生生活をどう送ったかや、どういう人間形成がされたかは、ほとんど問いません。匿名性でコンピューターで処理をしますので、どうしても他の能力や経験があった人というのは、机に向かって頑張った人に負けてしまうということがある。かといって、そういうところを評価しますと、量化、基準がはっきりしないので非常に不健全なところがあるという、そのところが大学の永遠の課題なのです。

だから、うちは非常に小規模で15名だけ、少しそれ以外の能力も聞きながら、学生時代にかかるた大会全国一とか、そういうものを聞きながら、それと学力をミックスして採りましょうと。学力一辺倒のところ、それなりに風穴を開けましょうということなので。ということで、AO入試を試験的に始めました。そうしたら、全国から非常に面白い能力が入ってきたので、学群長は非常に大成功と言っています。これも大成功かどうか、3年、4年続けないとわかりませんけれど。

(委員)

その辺りで、何か、プラスの成果が出てくるといいなと思います。

(学長)

キャラクターとして、非常に元気なエネルギーを持った人が来ていますね。受験勉強だけに偏らない、よい面も出てくるんだと思いますけれど。

(委員)

そうでしょうね、いろいろな能力を持っている学生がいるでしょうから。分かりました。

(委員長)

全体的に一時期はやりだった一芸入試とか、ああいうのは多少問題が多いというので見直しされているというのが、一般的な傾向です。

(学長)

基本的にはAO入試というのは一言で言えば、8月ぐらいまで、青田買いをやるための私立の手段なのです。私立大学は、とにかく受験勉強する前からAOと推薦で採ってしまう。それが5~6割というのです。そこで文科省から、学力のない人が大量に入っているということで、規制が入っています。国公立は8月1日以降にやれとか、何らかの学力検査、ペーパーテストかセンターテストかやって。入ってきて学力が低い人が出てきても、そのまま出しますので、日本の大学の質が国際的に非常に低い評価になっていると。これは私立大学の学生かき集め競争の結果として出ている。それから、附属高校をたくさん作る、そして、AOで入れる、推薦で入れる。したがって、一般入試、普通の人はなかなか入れないというのを作っています。国公立は、そこは一線を画そうということです。

(委員長)

そうですね。私も非常に疑問を感じているのは、例えば、高校時代に福祉活動をやったと。ボランティアで福祉活動をやったから、入試に便宜を図るというのは、これは私、大反対なんです。それではボランティアになりませんから。

ただ問題は、今はもう学生数が減って、私立大学でも、そういうことをしていると、恐らくその大学というのは、やがては淘汰される部類に入ってくるだろうと。だからこそ、学生支援とか、それからキャリア教育とか、こういうところに重点を注ぐと。そういう点

では、やはり北九州市立大学はよくおやりになっている。もう一つ言えば、学長以下のリーダーシップが非常に強いのと、それからもう一つは、ちょうど学生数が、規模が非常にコンパクトで、適正規模だろうという気は非常にしておりますね。

(学長)

そうですね。5,000人～1万人が一番いい。学生が集まっても、あまりにも大きいところでは目が届かない。

(委員長)

さようでございます。

(学長)

やはりこの辺が一番管理しやすいのかなと思います。

(委員長)

もう本当に適正規模だろうと思います。

どうぞ、私はあまりしゃべっちゃいけませんから、どうぞ。

(委員)

若年層が非常に減っている中、志願者がまた増えていっしょということ、非常に努力の跡が見えて、なかなか素晴らしいなと思って拝見したのですが、学生数が同じで、例えば、大学の質を高めるために教育の質を高めましょうとか、教員を増しましょうとかいうことになると、今度はコストの問題と、そこのバランス的なところが出てこようかと思うのですけれども、このあたり、教員増とかはまだこの先も続くのでしょうか。それとも、大体もうこれで落ち着かれるのですか。

(学長)

教員増は今後分かりませんが、例えば先ほどの、夜間主をほとんど昼間主に変えます。そうすると授業料が倍になるのです。定員156名のうち、それは追加収益が来ますので、例えば、年間1億円ぐらい増える。そのうちの60%を、先生を増やそうと。1人約1,000万として、6人増やせる。要するに増収を、見通しのあるところだけ定員化するというのをやります。特定のパイの中で増やそうなどというのは不可能です。ただし、学生数を増やさないと、結果的に教員数に対する学生数がよくなっていくということなのです。

(委員)

学生数は同じとおっしゃっておられたので、志願者数が増えて学生数が減っているということは、同じレベルと。

(学長)

学生数を変えると教育の質が落ちるといっているので、文科省はものすごく厳しい制度を。同じ学生数で教員を減らさない限りにおいては、組織を再編してよろしいという哲学なので、そのルールに乗って時間を掛けずに組織を再編する。でないと、設置審として、審議が1～2年掛かるのです。

(委員)

あと2点よろしいでしょうか。1つは、私も大学で応用数学とか教えていたことがございまして、今、高校生が数学の単元をセレクトするような教育になってしまっていて、理系でも集めてみると、私はベクトル知りませんとか、私は行列を知りませんとか、クラスの中でとても数学の能力がアンバランスで、専門教育をする前に、もう一度数学をやらないと、というような経験があったのですけれど、北九大さんもそのあたりは。

(学長)

文系と理系がありますが、ほとんどついて行けないのは理系なのです。文系は、飛ばしてもついて行けるのです。どこから参入しても。ところが、ステップアップを必要とするのは理系なのです。要するに、ここからついて行けなければ、もう次が分からない。もう、結構深刻な問題で特別授業をやっています。

(委員)

やはり、そういうことをされているんですね。

(大学事務局)

補習授業をやっておりまして、1年生の一番最初、オリエンテーションの期間中にプレースメントテストというのをやりまして、数学と化学と物理、それぞれの学科に関係しますが、それで成績の下位の人に関しては、1年生の1学期間、6限と7限の2限を使いまして、その人たちに全員、補習授業をするということをやっております。大体、それできんとやはり上がるようになります。

(学長)

先生がやったり、高校を辞めたOBの先生にアルバイトに来てもらったりしているのです。日本中の深刻な課題です。

(委員長)

例えば私どもですと、医学部に来ている学生で生物をやっていないのです。要するに、入試では物理と化学のほうが点数取りやすいわけですね。そうすると、生物やらずにどうやって人体を研究するんだと。だから、そういうのをやらせます。

それから、工学部でも数をやっていないのがいますね。だから、こういうのがやはり非常に困るのです。学長も理学部ですし、私も最初、数学やりますからよく分かるのですが、数学なんか積み上げ方式ですからね。どこかで分からなくなると、あと進めないわけですね。

それは、今はもう、全国のどこの大学でも。それから、文系でもそれに多少近いことがございまして、例えば、経済とか商学のところで世界史をやっていないのがいるのです。世界史をやって来ないと、産業革命の話をしていても分からないわけですね。だから、文系と理系では基本的に違いますけれども、要するに従来の受験科目だけの学生は、やはり大学に入って補習なり何なりで広くやらなければいけない。

そういう意味で、基盤教育なり何なりが大事だということになってくるわけです。

(委員)

ちょうど基盤教育の記述の中に、数学系が入っていなかったのです。

(学長)

そうですね、これはもう、理系はちゃんと。基盤ではないのです、基礎教養という、またもう1つの概念の教育があるのです。基盤というのは、語学と情報と一般教養なんですね。

(委員)

最後に1つ、プロジェクトルームというのがおありということで、学生プラザのほうに。このプロジェクトルームというのは、何かテーマを持って、北九州の企業さんとかと何か、販売促進しましょうとか、何かの開発しましょうとか、ブランドを作りましょうとか。

(学長)

大体、学生が集まって好きな企画、自由にやって、特定のサークルに属さないけれどやろうという機運が。サークル室がないので、今までは教室を借りなければいけなかったのです。喫茶店でやるというのが我々の時代でしたけれど、どうぞ、ご自由にと、一部屋シリーズの大きな部屋を作って、それで、白版に使いたい時間を書いておけば、空いていれば使えるという、そういうものです。

(委員)

自由な。

(学長)

そうです。全く自由というか、あるいは、教員指導とか、昼間は学生がフラダンスをやっています。

(事務局)

大学案内を置いていますけれども、これも15、16ページにちょうど学生プラザの絵が載っています。

(委員)

思ったのは、一つ大学発の、例えば、企業とマッチした販売促進とか、業務改善とか、研究開発とか、そういうのが動けばすごく面白いかなと。

(学長)

今、狙っているのですけどね。九大は、九州大吟醸とかいって。九州大吟醸ですよ、大吟醸ではないんですよ、ああいうのをうちもやろうと。農学部とかいうところが、非常にそういう点では成功しているのです。北九大は農学部はないので。工学部は、商売は下手ですよ。

(委員長)

鹿児島大学の農学部の焼酎は、大変成功してしまっていて、あの辺は地域にすごく貢献しています。やはり、そういうのが必要だろうとは思いますがね。

(委員)

地域創生学群のことで、AOと一般選抜の志願者数。いわゆる普通の受験生という人だと思ってよろしいのですか。

(学長)

一般選抜は、原則普通といたしますか。

(委員)

広く社会人もひっくるめてというようなことですか。

(学長)

社会人は社会人枠として取っています。

(委員)

だから、AOと一般選抜というのは、いわゆる普通の受験生、新卒だとか、予備校生だとか、そういう人たちが対象というふうに思ってよろしいのですかね。

(学長)

文科省の指導で国公立は、半分以上は18歳以上の、要するに普通にトライできる入試を下さい。全部、枠組みをやらないでくださいとしています。一般選抜とAOを足すと50%にならないといけないのです。

(委員)

基本的には、普通の受験生というイメージでよろしいということですね。

それと、志願倍率が5.6と0.2ほど上がっているのですが、このことは創生群の創設の貢献具合というか。

(学長)

かなり高いです。

(委員)

その影響で0.2上がっているということですか。

(学長)

そうです。ただ、今年はこれを引いたら減少しました。だから逆にいえば、同じ受験生でも、工学部は面白いなという形でシフトしているところがありますので、なかなかこの分析は難しいのですが、結果的に3年間増加しているのであって、寄与度はそれぞれ学部が違うということは確かです。

今回は、地域創生学群、400名くらい受けたんですよね。ですから、かなり大きな寄与度だと思います。

(委員)

志願倍率アップの、一つの大きな要素にはなっているという理解でよろしゅうございますか。

(学長)

そうです、間違いありません。その代わりどこかが減っているんですけどね。

(委員)

分かりました。ありがとうございました。

(委員長)

私のほうから大学院の再編のほうで2つあるのですが、1つはここでいうと6ページになりましょうか、国際環境工学研究科博士課程後期でこれ130人、特に環境システム50人、それから環境工学40人、この辺の定員充足率は十分ございますか。

(学長)

私立の学部並みです。要するに、非常に低いところと、ぎりぎりいっているところは。特に文系の修士課程は、大体駄目ですね。それで今、やはり、専門職、ロースクールか、そういうところのすぐ効果が出るところに入って、大学の先生なんてばかばかしくてやてられませんね。要するに、ドクターをやったって先生になれない確率が高いので、そういうときは修士のニーズがないのです。だから、税理士試験をまけてもらうとか、教員資格試験を取るとか、はっきりした効果を出さないと、激減しているのです。

(委員長)

ですから、後期の人数が多い場合に、これが今後問題に。

(学長)

問題になります。文科省も定員減ということをかなり言っています。

(委員長)

そうですよね、最近はその指摘をしています。だから、例えば学位取得率9人というのは、81%なので、母数はそんなに多くはないですもんね。

(学長)

そうです、ドクターはもともとの母数が少ないのです。修士がかなり多いところはありますけれど。

(委員長)

分かりました。だから、この辺の人数の在り方がこれから少し問題になるのですね。

(学長)

我々もやはり、みんなうまくいっていると言いながら、ここが一番、弱点だと。

(委員長)

それが1つと、もう1つ前のページで、先ほど学長が少し触れられましたけれども、いわゆる法学研究科のロースクールですね、これは全国的に非常に問題が多くて、実は、私どものところで作るときも、これを作るのも問題、作らなければなお問題。だから、作っても地獄、作らなければなおとってやったのですが、やはり結局、私立のほうは全部縮

小していますし、地方でもロースクールがあまり活発でない。

だから、新たに作るということは、果たしてメリットがあるのかどうか。

(学長)

ご存じのように、学内圧力と学外市場メカニズムのバランスの関係で、結果的にうちではずっと作っていないのです。これは、結果的には成功していると思います。

(委員長)

そうです、おっしゃるとおりです。私もそんな気がするのです。

(学長)

法学部の先生は許し難いと。法学部を持っているのにロースクールを持っていないところは、うちぐらいのもんだとよく言われますから。その圧力が非常に強いですね。

ただ、作りましようとはとても言える状況ではない。しかし、委員長が言われたもう1つの弱点がそこなのです。2つの大学院の話、そこなのです。転嫁しますと、文科省の教養部解体、大学院重点化、そしてロースクール。90年代強行したのが今、全部反省期になっている。

うちはもう、早々と文科省の指導なしで教養部の復活をやりました。ロースクールは作りませんでした。ですから、一勝一分けです。大学院については、やはり流れに乗っかりましたが、結構危ないところなので、きちんと見極めます。

(委員長)

全体の再編は大変よろしいと思うのですが、やはり定員充足率、その他を考えると、今後このところをどうするか。

確かに、ロースクールはもしかすると、今からではどうにもならないかもしれませんね。これは先ほどの話と一緒に、これをやるには結構、専門の教員、特に裁判官とか、弁護士とか、経験者を入れなければいけませんから、コストが掛かりますよね。

(学長)

だから、法学部教育、学士教育が瓦解しているのです。いい先生が、全部ロースクールに行ってしまう。

(委員長)

そうです、おっしゃるとおりです。

確かに、そういう時代ですものね。だから、これは先ほど学長おっしゃったように、文科省が10年、15年前にやったものが、一通り今、反省期にはいって。もう小中学校のゆとり教育なんていうのは、問題だろうと思いますけれど。

(学長)

今やっているのも、丸々乗っていいかどうかというところもありますね。10年たったら反省期に入りますので、やはり、自主的に考える能力を学長は持っていないと危ないのです。そこは、うちは結構、マイペースにやっているほうですから。

(委員長)

そういう意味では、やはり、どこでも皆さん、特に私立大学などの場合、文科省の意向というのをくまないと助成金減らされますから、この辺のところではやるのですが、必ずしもすべて100%がそのとおりかということ、もう本当おっしゃるとおりで、やはり、何割かはちゃんと客観的に評価しながら、改革を進めていくという姿勢が、大事だと思います。

(学長)

公立大学は、文科省の方針は丸々必要はありませんので。市との協力関係で評価委員会との話し合いの中でできるようになっていますので。評価委員会と市と我々の中で、きちんとした哲学があれば、独自の道を行けるとと思いますので、よろしくお願いいたします。

(委員長)

はい、分かりました。

どうぞ、ほかに何か。特にございませんか。

分かりました。それでは、これで学長との意見交換を終わりたいと思います。

どうも、ありがとうございました。

(委員長)

それでは、次の議題に移らせていただきます。次の議題は、「北九州市立大学平成20年度業務実績に関する報告」でございます。これも、先ほど学長からアウトラインはご説明いただきましたし、それから、6年間の中期計画の後半部分に入っておりますので、その辺を踏まえて大学のほうからご説明をお願いしたいと思います。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

《大学事務局より説明》

(委員長)

ありがとうございました。全169個も、これ、一つ一つ見るのはなかなか大変でございますが、大体、ただ今のご説明で、主要なところをご説明いただいたような気がいたします。何かご質問、ご意見等あれば、どうぞ、委員の皆さま方、よろしくお願いいたします。

(委員)

7ページの中期計画の一番下の5のところですが、数少ない「 」の評価のところなのですが、これは数字で見ると、確かに随分隔たりがあるなと思うのですが、これは何か理由があったりとか、今後の展望というか、数値目標そのものに無理があったのかとか、その辺のところ、大学のお考えをお聞きかせいただきたいのですが、

(大学事務局)

外国語学部長を呼んで、話をいろいろ聞いたのです。すると、2年次での目標を今回定めさせてもらっているのですが、2年次、今回、タコマ留学が、はじめて派遣留学をやったのですが、それで受験者数も80名ということで少ないですね。結果的に、後期でタコマに行った学生が、すべてTOEFLの試験を受けきれなかったというのがあります。それがこのTOEFLの受験者報告者数が少ないというのと相まって、結果的に低かったと。

それにしても、低すぎるのではないかということを書いたのですけれども、結局、当初の目標値の40%でしたか、これはタコマに行った学生、全部で50名ぐらいですか、そのぐらい全部行ったときに、行った学生は全部クリアできるという仮定で40%を持ってきているのです。でも、外国語学部としては、あくまで、やはり550点というのは、まだ目標としては持っていて、そのために頑張りたいというような意向はかなり持っています。

だから、TOEFLのための、例えば集中勉強会だとか、そういうふうなものはやっていないのです。それで、タコマのほうにかなり集中しすぎたというような面があって。だから、今後は、そういった集中的な勉強会みたいなのを少し入れながらだとか、そういうものも企画していかないといけないなというところで、少し外国語学部のほうも考え方を改めたというか、少し引き締め直したというか、そういう形で今後進めていくというふうなことです。教育研究審議会のほうでも、きちんとそういうふうな発言をされました。

だから、ちょっと高過ぎたと言うには、まだ少し早すぎるかなというような感じがしています。もう少し見ていただければと思います。

(大学事務局)

ここは、この前、私の所で数値目標を出させていただきました。今、申しましたように、タコマに留学した学生の、実態的にはそこで生活して帰ってきますから、英語力はあるというふうには見ているのですが、試験ということになると、また少し違うところがあり、その辺の教員のほうの認識の問題もございまして。ただ、来年も、今年も頑張っていくわけですが、やはりこの数値目標を設定する難しさというのが、ここにありまして、それぞれ、学生、教員も努力をした結果として、ここに届かないといったところに、これはもう毎年度の評価ですので、これはこういう評価でも構わないとは思っているのですが、中期計画全体を見たときに、この辺の評価をどうするかということについては、また、見ていただければと思っております。

(委員長)

タコマに派遣した学生が入っていないのですか。

(大学事務局)

アメリカに留学した学生が、まだ受験を全部していないというのが1つです。それと、受験した学生についても、半年間そこでやってきた、向こうの授業を受けてやってきたという実績と、それなりの能力はあるのですが、やはり試験になってしまうと、受けた学生でも全部が全部、そのとおりに取れなかったところがあって。

(委員長)

その前にもう一つ、では、タコマへ派遣する学生の選考の時には、この点数なんかは全然考慮しないのですか。

(大学事務局)

簡易版のTOEFLの試験がありますよね。あれでやっているみたいなのです。外国語学部としては、この数値には反映させないんだと言っているのです。それ以上は、私も突っ込まなかったのです。

(委員長)

そうですね。というのは、よその大学では、やはり海外への留学制度その他のときに、やはりある程度、550とは言わないまでも500点とか520とか、それぞれ設けて、それをクリアしないと行かせないなんていうのもあるので、そこら辺との兼ね合いでね。だから、この派遣する学生の選考とか、この試験とかをうまくこう。

(大学事務局)

これをちょっと見ていただきたいのですが、実はこれ、2つありまして、ここは要するに、基盤教育、要するに全員でやります1、2年までの基盤教育の部分と、プラスアルファの専門のところがございます。基盤のところ、いわゆる460点以上で50%と、だからその部分ではこれをクリアできている。当然、留学するに際してもこれを含めてやっていますので、だから、決して能力のない学生が行っているというわけではなくて、この目標自体がさらに上のほう、先ほど少し言いました、やはり若干、パーセントからして目標が高いかないといったところもございます。当然、選考のところは基盤のところと、それも入れていますので、その部分にはあまり問題はないかなとは思っているのです。今、言いましたように、1つはやはり、50名といたしましたけど、前期はまだ半分しか行っていませんし、少しそういったタイムラグの話もあるのかなとも思います。

(委員)

いろいろな工夫というか、例えばその受験の時期と、それからタコマに行く時期ということとか、いろいろ出てくるのですよね。

(大学事務局)

そうですね。先ほども言いましたように、学部長ももう一度、ちょっとその辺の認識を改めて、やはり立てた目標ですので、クリアーのために。

(委員長)

そうですね。だから、もう一つの考え方は、1年生でこの基盤のほうの460をやっていますよね。そしたら、タコマに行ってきたり、いろいろなことを踏まえて、例えばこれ、2年次ではなくて3年次で、少なくともこのくらいまで到達するというようなことを考えるのも、1つかなという気もします。まあ、2年次に置いた理由というものもあるのでしょうけど。

(大学事務局)

19年度から新カリキュラムの中に入れ込んでいるものですから、どうしても20年度については、1年生、2年生という形で、どうしても2年次という形にしかならなかったというのがあるのです。だから、21年度の計画では3年次での数値目標を出させてもらうという形になります。

(委員)

話を伺っていて、逆に、目標のためにやるべきことがひっくり返ってしまうのではないかなというのが、少し気になっているのですが。現場の先生方はこれでいいんだというところで、大学のほうが、この目標だからそれに合わせてなんとかしろというのも、ちょっと違うかなと。そこら辺のニュアンスというか、ご理解いただいて、目標達成のためだ

けに何かやるというのは、少し考えたほうがいいと。私どもの評価が、たとえ、それで下がったとしても、そのことのために学校でやるべきことを変えるということはやめてほしいなというのがあります。

(大学事務局)

もちろんそうです。専門学校ではないからですね。いろいろなことを外国語学部の中で勉強してもらわないといけない。ただ、550点というのは、大学が上から550点と決めただけではないです。外国語学部のほうで、現実的な目標値として何点にするかということから出てきた数値ではあるのです。ただ、今までやっていないのですよ。だから、どの程度にやっていいかというのは、先生たちの感覚的なものしかなかったというのは、それは事実です。

(委員)

その辺も踏まえて、ぜひ達成のためだけに、やるべきことをほったらかして、こっちにいくということだけは、そこはぜひご配慮いただきたいと思います。

(委員長)

ただ、学会その他では、北九州市立大学の場合は、語学の評価が非常に高い基準になっているのです。大学の教員でも、北九大の英米文学ですとか、あるいはこの学部を出て、そして、よその大学院に行って大学の教授になっているというのが、かなりいるのですよね。そういう人の話も聞きますので、そうすると、今の委員のお話のように、目標があるためにいろいろやるのではないのだけでも、やはり全体の教育をした結果として、このくらいということに到達してほしいという気はいたしますね。

(大学事務局)

TOEICの基盤教育でやっている分で、学部別で見ると、やはりさすがに外国語学部は断トツに高いのです。やはりTOEFLというのは、一般の、何というか、社会人としての会話だったり違って、学術的なものだとか、いろいろな向こうでの留学のための用語だったりとか、そういうものが入っているから、やはり特別な勉強をしないとイケないのかなと。

(委員長)

そのために予備校もあるわけですからね。必要なんでしょうけども、例えば私どものほうでは、交換留学に出すときは、やはりある程度の点数と同時に、学外での英語の試験をちゃんと課して、それが一定レベル以上でない駄目と、こうやるわけです。そうすると、どうしても英語専攻学生のほうが断然上をいってしまいますから、ほかの学部のトップも平均点をとってしまいますと、いけないのです。だから、そういうのも出てきますから、ここは1つの目玉ですから、そういう意味で、ぜひお考えいただければよろしい。これはだから、システムとしてではなくて、むしろ、学部の先生方にそういうお話をさせていただくことになるだろうと思います。

ありがとうございました。どうぞ、ほかに何かご意見、ご質問ありましたら、遠慮なく。

非常に細かい評価をしなければいけないのと、それからもう一つは、全体としては非常に進捗状況がよろしいのです。ですから、そんなに大きな問題はないような気もいたしますので、特にはないと思いますが。

何か、どんな細かいことでもいいですから、お聞きいただいでよろしゅうございますので。

(委員)

4年目にして、非常に見やすくなりましたので、ありがたくお礼申し上げます。

(大学事務局)

いろいろご迷惑をかけました。

(委員長)

確かに委員は最初から、その点をずっとおっしゃっていましたので。

それと確かに、我々も慣れたというのもございまして、そういう点で大変見やすくなって、きれいに。

(委員)

ご苦労されたと思います。本当にありがとうございました。

(委員長)

何かほかに、よろしゅうございますか。では、ご意見等ございませぬようですので、この問題をこれで終わらせていただきます。ご報告ありがとうございました。

それでは、次の議題、最後、「今後の予定」ということで、事務局のほうからご説明をお願いいたします。

《事務局より、今後の予定について説明》

(委員長)

ありがとうございました。

委員の皆さま、ご意見、ご質問、お聞きしたいこと、何かありましたら、どうぞおっしゃってください。特にこの評価の内容、評価書の作成について、事務的にあつたら。

(委員)

はじめてなものですから、この実施状況が、はっきり判定がしづらいときというのは、大体、空欄にしておいてくださいという話でしょうか。

(事務局)

評価はあくまで年度別の進捗状況でございますので、大学のご説明がありましたので、計画どおりいっているか、いっていないか、そのレベルを入れていただくと。それで、遅れているかどうか、もしくは、これはすごいなというところがあれば、その中に個条書きで書いていただくということで、まずは個別評価を行っていただければと思っています。

(委員)

基本的に、達成度というのは書いてある、それこそ数値目標を達しているかどうかということで見ると。

(事務局)

記述したのを読んでいただく、もしくは説明を聞いていただいた中で、この項目については計画どおり達成していると判断されれば、 という形でいれていただくということでもよろしいかと思えます。

(委員)

ちょっと内容を存じ上げている部分と、全然存じ上げない部分とがありまして、どうしたら良いかというのを、ちょっと見ながら考えておりました。

(委員長)

中期計画が、この一番左には入っているのですが、我々は中期計画作成からかわってきたから分かっているのですが、新任の方は大変ですが、中期計画の流れなり何なり分かるものがあつたら、お渡ししておくのがいいのではないかなという気がしているのですが。

(事務局)

分かりました。そちらのほうは事務局のほうで。

(委員長)

よろしゅうございますか。最初のときに作成しました中期計画の全体の流れというのがありますから、その辺があると、どういう中期計画でどこまでの達成度かというのが分かるような気がします。

(事務局)

そうですね、分かりました。ではまた、個別にそのご説明に寄らせていただきます。

(委員長)

ほかの委員はよろしゅうございますよね。もう、私どもは結構ですから。

ほかに何かご意見、ご質問、よろしゅうございますか。

あとは、評価調書の記載について、17日に聞いて22日は難しゅうございますから、ちょっと大変かなとは思いますが、どうぞ委員の皆さま方、よろしくお願ひいたします。

それでは、少し時間をオーバーしたのですが、今日は初日ですので、ご報告なりご説明がたくさんありましたので、お許しいただきたいと思えます。

ほかに質問もございませんので、終わらせていただきたいと思います。